

健康文化

わが闘病記（その3）

岡島 俊三

サナトリウムでの1ヶ月足らずの間の絶対安静の生活で病状も安定して、漸く午前午後各10分の散歩と、林間静臥の日課表を手にすることができた。

サナトリウムは山のふもとにあって、敷地内の林の中の道が散歩道であった。また、林のなかのあちこちに籐の寝椅子が置かれていて、そこで1、2時間静臥して過ごすことができるようになっていた。

季節も9月中旬になって、暑さも漸くやわらぎ、樹々の匂い、野鳥の囀りを聞きながら自然の中で過ごす時間は、気分も一新して誠に爽やかで快適であった。

同室であった天文学者の石井さんが転出された後、同室になったのは大阪の小野さんという中年の軽症の方であった。この方がなかなかの読書家であり、刺激をうけて読書を始めることになる。

ベッドに寝た姿勢で読書をするのに便利な書見器というものがあるのを知り、早速売店から購入する。本を見やすい位置に固定することができるので本を手で持つ必要がない。ページをめくる時だけ手をうごかせばよいので腕も疲れず、仰臥したままで読書が楽しめる。「本を持つ腕がだるい」を一発で解決してくれる。

ミッション系の施設にいるせいで、先ず読み始めたのは聖書である。新約聖書、旧約聖書は分厚くてなかなか読み度がある。熱心に苦勞して繰り返して読んだ。

宗教のもっている神秘的な側面、たとえば天地創造説、イエスの死後の復活、あるいは水上歩行などの奇跡は近代の合理的な理性によって史実的な事実として字義通りには到底受取ることは困難である。

聖書は神の言葉といっても、時代性や民族性に制約されている。仏教でも同様と思うが、矛盾したことがまことしやかに説かれている。そこは冷静に読み分けてゆくことが必要であろう。いずれの聖典も時代や民族背景の所産でありながら、同時に時代性や民族性を超えているところがあり、そこを読みとることが必要であろう。

聖書は、あくまでも自己流に読んだ程度であるが、イエスの言葉の中には権威があるというか、それまで全く気づかなかった、はっと心に響く言葉が随所に見られ、貴重な心の栄養になったと思われる。

前年の昭和13年の秋に、岩波新書が岩波文庫の古典的な知識に対して、現代人の現代的教養を目的に新しく刊行され、数十冊が定価五十銭で発行されていた。

早速その中から、斉藤茂吉の『萬葉秀歌上・下』、ジーンズの『神秘的な宇宙』、武者小路実篤の『人生論』、天野貞祐の『学生に与ふる書』を手に入れて読み始めた。

読書の時間はありあまるほどあるし、これまで在学中は学業に迫られて自由な読書はあまりできなかったのが、手当たり次第読書してみると、頭の中の乾いた砂地に知識の驟雨が吸い込まれるような感じであった。

天野氏の『学生に与ふる書』で推薦される本で、カールヒルティの『眠られぬ夜のために』、『幸福論』、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』も入手して読んだ。

ヒルティの思想は穏健で常識的ではあるが、確かに人生の知恵を含んでいる。

特に読書について、次のような原則が示されている。

- 1) 多読のすすめ。
- 2) 凡ての良書を読むことを心掛ける。
- 3) 良書を熟読し、しかも繰り返し読む。

悪い本を読まないことは良書を読む条件である。

読書には元来純粋に学問的研究のため、教養のため、単なる娯楽のため等があり、一般教養のための読書は、「良書の熟読」が第一原則であるが、これとともに広い範囲の通読も必要である。視野の広い人生、世界観を養う上に広範囲の読書は大きな力がある。

これらの意見は肝に銘じて、できるだけ心掛けようと心に決めた。

病院の図書室には日本の古典文学の有朋堂文庫があり、その中に『源氏物語』があった。これを借りて頭注をたよりに読み始めた。なかなか難解で読み進めなかったが、苦勞して何とか読破することができた。やはり図書室にあったダントの『神曲』、プラトンの『国家』なども読みかじった。

林間静臥などするようになって、互いに話しかけるような友達がぼちぼちできるようになった。

当時結核といえば、国民の最も恐れる死の病である。もし家族の誰かが結核

を患うと、近所にも知られないように家の離れなどに隔離して寝かせるのが精一杯で、当然何の治療もしないし、したがって治る筈もなく、ただ黙って死を待つ以外になすすべがないというのが一般の風習のようであった。

わが家では勿論そんなことはなくて、医者の手厚い治療も受け、差別を感じるようなことは全くないのであるが、それでも精神的に何か世間に対して引け目を感じるというか、肩身の狭い思いがするのであった。

サナトリウムに入ると、周囲は同病者ばかりの別世界であり、精神的なストレスは解消して開放感を味わうことができた。そこで接する人々は自分の過去について何も知らない人ばかりなので、過去のしがらみから解放されたというか、ほっとした楽な気分になることができた。新しくできた友達とは裸の付き合いができて、青年の客気にまかせて自由奔放な率直な意見を述べ合うことが出来た。

9月の下旬、レコードコンサートが催された。患者の中に豪華な電蓄とクラシックレコードを沢山持っている人がおり、解説を聴きながら楽しんだ。この日伊藤さんを知る。彼は四日市の方で東京商大（現一橋大学）の三年の学生で、太った立派な体格で一目健康人に見える。

なおこの日に、前に同室であった天文学者の石井氏は大咯血があり、翌日には遂に39歳の若さでもって惜しまれつつ世を去られた。

チャペルで葬儀が行われたが、奥さん、可愛いお嬢さんの悲しみは如何ばかりであったろうか。

10月頃になると病状も安定し、三重県で会社重役の鈴木五郎氏、中学生の吉本、夫馬君らと親しくなり、林間静臥の折、あるいはロビーで話し込むようになる。

10月の末、初めて朝の礼拝に出席する。サナトリウムには山の斜面に小じんまりとしたチャペルがあった。座席数は50席位で、そこで礼拝が行われた。専任の牧師もいるのであるが、職員、看護婦、その他にも病人で洗礼を受けている人が毎日交代で司会して、聖書の朗読、ちょっとしたお話、讃美歌などで10分か15分で終了する。これが毎朝行われ、都合のつく限り参加するように心掛けた。

11月になって、同室の小野さんは軽症の方であったが小咯血があり、別の部屋に転室され、伊藤さんと同室になる。彼も学生で、若い者同志で通ずるところがあり、毎夜遅くまで話し込むことが多かった。彼は読書家であり蔵書家でもあり、阿部次郎の『三太郎の日記』、西田幾多郎の『善の研究』、『日本文化の

諸問題』、島木健作の『生活の探求』など借りて読んだ。

彼はまた、まとめて買った方が安いといって林檎を大きな木箱ごと購入するので、それを分けてもらって食べたりした。(因みに当時林檎1箱6円くらいで、したがって1個が7、8銭くらいであった。)

入っていた新生館という病棟の2階のフロアは男子ばかりであり、皆顔見知りになる。フランス文化の心酔者の根箭さんとか、大阪の判事の息子の朝尾さん、阪大理学部の化学専攻の今村さんとも親しくなり、互いに部屋を訪問したり、ロビーの火鉢を囲んでの談話にふけることも多くなった。

12月に入った頃から、午前午後の散歩も2、3人連れだつて、時間も30分くらいに延長し遠出もするようになった。

クリスマスには、夜明けに聖歌隊のクリスマス聖歌で目を覚まされ、午前の礼拝、夜は有志による劇『ベツレヘムの星』、『愛あるところに光あり』が上演され、楽しい思い出となった。

世界では、第二次世界大戦でドイツのポーランド侵攻、ソ連のフィンランド侵入、支那事変は膠着状態で、経済状態も益々深刻になり、価額統制令、米穀強制買上制の実施などが行われようになった。

しかしサナトリウムはまるで別世界のような雰囲気で昭和14年を終わろうとしていた。

(長崎大学名誉教授)